

平成16年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 イカナゴ類

学名 イカナゴ (*Ammodytes personatus*)
キタイカナゴ (*A. hexapterus*)

系群名 宗谷海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 6歳以上

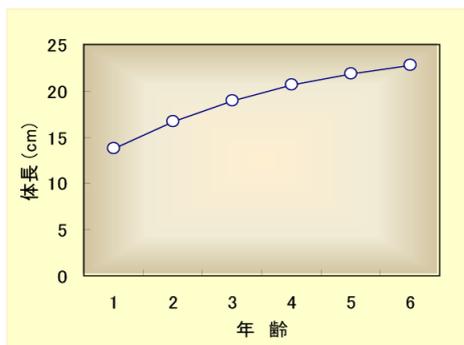
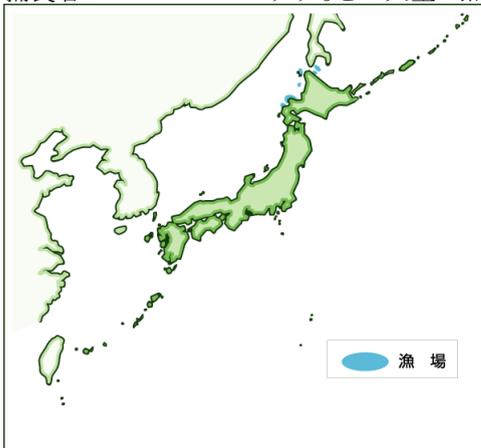
成熟開始年齢: 2歳

産卵期・産卵場: イカナゴは春季(3月下旬~5月下旬)で、稚内、枝幸および利尻礼文島周辺の沿岸域、キタイカナゴは初冬(11月下旬~12月)で、サハリン周辺の沿岸域

索餌期・索餌場: 主に宗谷海峡周辺の水深40~80mの砂礫地帯

食性: 未成魚はカイアシ類などの浮遊性甲殻類、珪藻類、成魚はカイアシ類、端脚類、オキアミ類、十脚類、矢虫類、魚類

捕食者: マダラなどの大型の魚類、海鳥類、海産ほ乳類

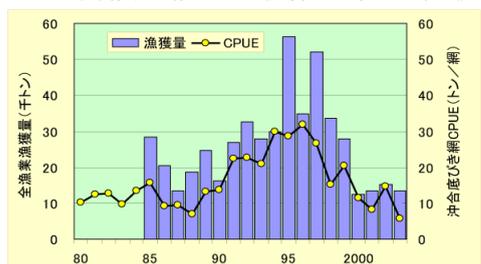


漁業の特徴

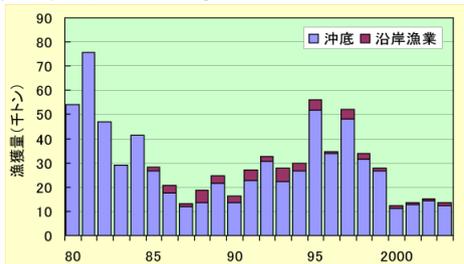
宗谷海峡周辺に分布するイカナゴ類には、イカナゴとキタイカナゴの2種が含まれているが、漁獲物ではこれらが分離されていない。当該資源は、敷網などの沿岸漁業でも漁獲されるが、大半は沖合底びき網(沖底)によって漁獲されている。また、沖底漁業は、主に6~9月に1~6歳魚を漁獲するのに対し、沿岸漁業は、主に4~7月に0~3歳魚を漁獲している。なお、沖底漁業は、ハマチの餌としての需要を考慮しながら行われる。

漁獲の動向

沖底の漁獲量は、1988年以降増加傾向を示し、1995年には約52千トンに達した。その後は減少傾向に転じたが、2000年代に入ってから11千~15千トンで推移しており、2003年の漁獲量は約12千トンであった。一方、沿岸漁業では毎年数百~数千トンの漁獲があり、2003年の漁獲量は約11千トンであった。



注) 1984年以前の漁獲量は、沿岸漁業について未集計のため除いてある



注) 1984年以前の沿岸漁業の漁獲量は未集計

資源評価法

当該資源は主に沖底によって漁獲されるが、本漁業は需要を考慮しながら行われるため、その漁獲量は資源量を直接に反映するものではないと考えられる。そのため、沖底のCPUEを基に資源評価を行った。しかしながら、宗谷海峡周辺のイカナゴ類は、ロシア水域とまたがって分布しているため、日本漁船のCPUEが、どれほど当該資源全体の資源量を反映しているかは不明である。

資源状態

沖底のCPUEは、1980年代には7~16トン/網で推移していたが、1990年代に入ると増加傾向を示し、1996年には1980年以降最高の約32トン/網に達した。しかし、その後は減少傾向に転じ、2003年には1980年以降最低の約6トン/網となった。したがって、資源水準および動向は、それぞれ低位で減少傾向と判断した。

管理方策

近年、沖底の漁獲物に占める体長15cm未満の個体の割合が非常に少ない。卓越年級群であった1992年級群は、体長約14cmから漁獲され始めたことを考慮すると、イカナゴ類の近年における資源水準の低下は、1992年級群のような豊度の高い年級群が発生していないことによるものと考えられる。また、2003年には体長15~20cmの個体もほとんど漁獲されておらず、今後さらに大型魚主体の資源構成となり、資源が悪化する可能性がある。このような状況の下、北海道は本海域のイカナゴ類のほとんどをイカナゴとみなし、2004年からイカナゴを資源回復計画の対象種とした。



	2005年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	-	-	-	-
ABCtarget	-	-	-	-

資源評価のまとめ

- 沖底のCPUEを基に資源状態を判断
- 沖底のCPUEは近年減少傾向にあり、2003年には1980年以降の最低値となったため、資源水準は低位、動向は減少傾向

管理方策のまとめ

- 2003年には体長20cm以下の個体がほとんど漁獲されていないため、今後さらに大型魚主体の資源構成となり、資源が悪化する可能性がある
- 北海道は、2004年からイカナゴを資源回復計画の対象種とした

資源評価は毎年更新されます。